在外教育施設帰国報告

虹の国（Rainbow Nation）南アフリカ　ヨハネスブルグ日本人学校

前南アフリカ共和国ヨハネスブルグ日本人学校
北見市立西小学校　教諭　河　原　　賢

１．南アフリカ共和国の概要

（１）地理・気候

南アフリカ共和国はアフリカ大陸の最南端に位置し、総面積は１１２万３２２６㎢で日本の３倍以上に相当する。南緯２２度から３５度に位置しており、ナミビア、ボツワナ、ジンバブエ、モザンビーク、スワジランド、そして飛び地のレソトと国境を接している。自然環境は変化に富んでおり、国土の中央には４０万㎢にわたり海抜１５００m以上の乾燥した盆地グレート・カルーが広がっている。東部には標高３０００mをこえる世界遺産にもなっているドラケンスバーグ山脈がそびえ、その東のインド洋沿岸には緑豊かな平地がある。また、北西部には広大なカラハリ砂漠が広がっている。四季折々で様々な風景を楽しむことができる。

１年を通して晴天の日が多く、年間平均日照時間も世界で最も長い国といわれている。年間平均気温はヨハネスブルグで約１７℃となっており、海流と標高（約１５００m）の影響で意外と涼しい。冬は場所によって雪が降ることがあり、２００７年６月にはヨハネスブルグでも２６年ぶりの積雪があった。

（２）歴史

南アフリカ一帯は、もともと狩猟民族のサン族・コイ族の居住地であった。１４８８年にポルトガルのバーソロミュー・ディアスが喜望峰を発見、１４９７年にはヴァスコ・ダ・ガマが今のクゥアズル・ナタール州を発見した。南アフリカに白人が最初に定着したのは、１６５２年オランダ東インド会社が東方貿易の中継地として、ケープタウンにヤン・ファン・リーベック率いるオランダ人を入植させた。その後これらの白人は次第に奥地へと移動し、農耕や牧畜で生活を送るようになった。ついで、ナポレオン戦争によって１８世紀末、イギリスはケープタウンを攻略し、１８１４年正式にイギリス領となった。イギリスの支配を嫌ったアフリカーナたちは内陸部へ移動し、原住民と戦いながらトランスバール共和国やオレンジ自由国を建設した。

１９世紀末、金とダイアモンドが発見されると、その産地支配権をめぐってイギリスとの間にボーア戦争がおこった。戦争はイギリスが勝ったが、アフリカーナにオレンジ自由国およびトランスバール共和国に自治権をあたえ、１９１０年、南アフリカ連邦を成立させた。１９４８年にアフリカーナの国民党が政権を樹立、アパルトヘイト体制を築いたが、国際社会から非難されたため、１

９６１年イギリス連邦から脱退し、共和国となった。

その後長い間、世界から孤立して人種差別体制を維持し、反政府運動を弾圧してきたが、１９８９年に大統領になったデ・クラークは改革路線に転換、服役中のネルソン・マンデラを釈放し、１９９１年、ついにアパルトヘイトは撤廃された。この後、南アフリカは国際舞台に復帰し、マンデラとデ・クラークは、１９９３年ノーベル平和賞を授与された。そして１９９４年全民族参加による総選挙により、ネルソン・マンデラが大統領となった。１９９６年新憲法が公布され「虹の国」として歩みだした新生南アフリカ、１９９９年にはマンデラが政界から引退。その後継者としてムベキ氏が現在 ANC の議長、大統領である。

（３）南アフリカの人々

南アフリカはその歴史が示すとおり多民族国家である。総人口は約４７００万人であるが、実際のところ不法移民が多いため、明確な人口は把握できていない。その中で大多数をしめるのが、長い期間をかけて南に下ってきたアフリカ系黒人である。もっとも多いのがズールー族、そしてコーサ族、その他にソト族、ツワナ族、ンデベレ族、ベンダ族などがいて全人口の約７６％をしめている。その次に多いのがイギリスやオランダ、フランスなどヨーロッパからの白人の移民である。近年はポルトガル、ギリシャ、ハンガリーからの移民も増え、約１２％をしめている。そして、カラードと呼ばれる混血の人々が約９％、インド系を含むアジア系が３％となっている。

公用語は１１言語あるが、日常会話については英語が中心となっている。しかし、国営放送ではニュースを中心に様々な言語が使用されている。

（４）産業・経済

南アフリカの経済的発展を支えてきた重要な産業は鉱業である。この国からは石油を除くとほとんどすべての天然資源が採掘されている。特に、金・ダイヤモンド・石炭・ウラン・クロム・マンガン・鉄鉱石などは、世界経済にとって欠くことのできないものであり、生産量、埋蔵量ともに世界で大きなシェアを占めている。

工業も豊富な鉱産物と優良な港に恵まれ、めざましい発展を遂げている。主な生産物としては、機械、鉄鋼、化学、織物と重工業から軽工業まで幅広く、世界市場への進出が期待されている。

農業は、ほとんどの作物を国内で自給しており、タバコやトウモロコシ、小麦など各国に輸出している。特にサトウキビは重要な産業の一つで、世界でも有数の規模を誇っている。

日本との関係において、南アフリカからの輸入品で特筆すべきものにプラチナがある。２０％が南アフリカからのものです。またマグロや伊勢えび、ワインの輸入も急増している。

（５）政治

国は三権分立制をとり、行政府の首都はハウテン州にあるプレトリア、立法府は西ケープ州のケープタウン、オレンジ自由州ブルームフォンテンが司法府の首都となっている。国会は二院制になっており、上院（州議会が選出）下院（国民選挙により選出）で構成されている。アフリカ民族会議、国民党、インカタ自由党を中心にいくつかの党が議席をもっている。

（６）その他

南アフリカといえば地上のサファリであるが、数え切れないほどの鳥類、そしてクジラやペンギン、オットセイなどの生息地でもあり、たくさんの海洋動物が見られる。特に南アフリカでは３７種類ものクジラ、イルカ類が見られる。さらに日本では見ることのできない植物などもあり、南アフリカ原産のものも数多く見ることができる。

２．現在の国内情勢について

アパルトヘイトが終わって１０年以上が経過したが、黒人にとってよりよい環境になってきているとは言えないところもある。生活に関しては貧富の差が拡大する一方、高い失業率が改善されていない。教育に関しては、アパルトヘイト時代に黒人は理数系の教科を教えてもらえなかったこともあり、その時代を過ごした人たちが就職しても事務的な能力がスムーズではない。また、教師の中にも数学や理科を教えることができない人が多くおり、ＪＩＣＡ青年海外協力隊などのサポートを受けながら改善を図っている。さらに、学校施設についても差が大きく、都市部と郡部、都市部の中でも差があり、問題となっている。

マンデラからムベキへと大統領が移り、ある一定の成果が見られるものの、多くの民族を抱える南アフリカにとって、リーダーになりうる人物がなかなかいない。２００９年には大統領選挙を実施するが、汚名高き人物が大統領になる可能性が高く、白人社会ではこの国に失望し、さらに黒人の中でも優秀な人物は海外へと移住を始めているのが現状である。

この国にとって今大きな問題がある。それは、ＨＩＶ／Ａｉｄｓと電力不足である。

まず、ＨＩＶ／Ａｉｄｓであるが、国連エイズ合同計画によれば、２００５年１２月現在、約３８６０万人が感染しているといわれている。しかし、これははっきりした数字ではなく、少なく見積もって約３３４０万人、多ければ約４６００万人といわれている。南部アフリカ（サハラ砂漠以南）では、約２８００万人～約３０００万人がＨＩＶ／Ａｉｄｓである。南アフリカは約５５０万人、スワジランドは約２２万人、ジンバブエは約１７０万人である。人口との割合を見ても、南アフリカの感染率は最も高い。南アフリカの感染率が多い理由として、歴史的背景があり、アパルトヘイトがもっもと大きい。アパルトヘイトによる家族の崩壊、それにより、不特定多数の男女関係が生じてしまっている。政治的要素として、南アフリカはＨＩＶ／Ａｉｄｓのしっかりとした政策をもっていない。また、ＡＲＶ（ＨＩＶからエイズにならないといわれている薬）の配布が２００４年からと遅れてしまった。感染者が拡大することにより、経済的な影響も大きく、さらに孤児たちが増えていく傾向にある。

次に電力不足の問題である。２００７年から電力不足が深刻な問題となっている。アパルトヘイト以降、電力の消費量が増えていく中、政府が経営する電力会社が発電所の建設をしてこなかったためである。そのため、近隣諸国への送電をやめ、国内でも週に２回、２～３時間程度の停電を意図的に行っている。そのため、こちらも経済的な影響が大きく、生産性も伸び悩んでいるのが現状である。さらに、国民生活にも大きな影響を与えている。

様々な状況から国際的に見ても世界でトップクラスといわれるぐらい犯罪（強盗・窃盗・レイプなど）が多く、治安は悪く、警察官の質もよくない。貧富の差、大量の不法移民が要因とされているが、２０１０年ＦＩＦＡワールドカップサッカーを控えている今、果たして実施できるのかどうか国内でもいろいろといわれている。

自然豊かで、観光地としても見るべきものが多い南アフリカ。今後どのように変わっていくのか注目をしていきたい。

３．ヨハネスブルグ日本人学校について

（１）ヨハネスブルグ日本人学校の概要

１９６６年（昭和４１年）８月３１日に開校し、翌年１９６７年（昭和４２年）４月に全日制の日本人学校として、正式に認められた。そして１９７５年（昭和５０年）日本国における小中学校の教育課程と同等の過程を有する在外教育施設としての認定を受けた。

運営の主体は南アフリカ日本人会にあり、南アフリカの私立学校として登録されている。そして、南アフリカ国内における私立学校と同等の扱いを受けている。

ヨハネスブルグ日本人学校はヨハネスブルグ市内にあり、緑豊かな閑静な住宅地に位置している。世界の日本人学校の中でも長い歴史をもつ学校である。２００６年には開校４０周年を迎えた。

（２）児童生徒、教職員

平成１９年度末の児童生徒数及び教職員数は下記の通りになっていた。

●小学部…３８名、中学部…１０名

・各学年とも学級数は１、複式はない。

・在籍年数は、平均すると約３年

・児童生徒数は、ここ数年４５名前後で推移

・文部科学省派遣教員…１０名（教頭派遣がなくなり、１０名へと減った。）

・現地採用職員…英会話講師２名、秘書１名、事務官１名、学校採用ガードマン１名、ガーディナー２名

（３）ヨハネスブルグ日本人学校の教育

①ヨハネスブルグ日本人学校の１日

◆朝の活動

８時から２０分間、曜日によって朝の活動が組まれています。その後１０分間は朝の会になっている。

●月曜日…第１と第３は全校朝会、第２と第４はヨハネスタイム（主に全校読書）
・全校朝会では第１月曜日は校長先生の講話、第３月曜日は順番で教師が講話をする。
・ヨハネスタイムは各教室で読書をしたり、行事前であればその練習をする。

●火曜日と木曜日…教室の清掃（小学部１年～中学部３年教室）
・清掃は小学部１年から中学部３年までで縦割り班を設定し、１ヶ月に１回清掃場所を変えている。

●水曜日…全校英会話
・全校英会話は、英語教諭→一般教諭→英語教諭→一般教諭というように順番で行います。もちろん私も英語で授業をしなくてはいけません。小学部１年から中学部３年までの全児童生徒が対象ですからけっこう難しかった。

●金曜日…特別教室の清掃（体育館・音楽室・理科室・図書室など）

◆午前の部
・小学部・中学部とも４５分授業になっている。
・ほぼ毎日、２０分間の「英会話」、さらに小学部４年生までは週１時間、小学部５年生以上は週２時間の「４５分英会話」が組み込まれている。
・子どもたちはお弁当を持参してくる。だいたい学年毎に集まって、校内のベンチや教室などで食べる。この国では停電がよくあるので、お弁当が作れずカップ麺を持ってきたり、ファーストフードなどで買って、お昼頃保護者が持ってくることもある。

◆午後の部
・小学部１年生…週２６時間、小学部２年生…週２７時間、小学部３年生…週２８時間、小学部４年生…週２９時間、小学部５・６年生…週３２時間、中学部…週３３時間となっている。
・火曜日はクラブ活動、または委員会活動（６０分）
・木曜日は課外活動（６０分）
　部活がないこともあり、体を動かす機会の少ない子どもたち。そこで、週に１回、課外活動ということで、サッカーやバレーボール、バスケットボールなど球技を中心に教師たちが指導している。
・中学部補習授業…中間、期末テストの前５日間は６０～１２０分の補習授業を行う。

②現地理解教育・国際理解教育
◆ＩＲグリフィス校との交流（全校児童生徒対象）
…年３回

・日本人学校の児童とＩＲグリフィス校の児童がペアーになって、様々な活動をしていく。お互いに身振り手振りで英語を使いながらコミュニケーションを図っていた。

・日本人学校では、日本文化（折り紙、お好み焼き作り、習字、相撲など）の紹介を行う。
・ＩＲグリフィス校では、パートナーと一緒に物作りやダンスなどを行う。
・両校によるたこあげ大会を行う。

◆Ｓｔ．スティシャン校との交流（中学部対象）…年２回
・お互いの学校を行き来し、それぞれの授業を受ける。授業の内容については、お互いが意欲的に取り組めるような特別授業を行う。

◆エルムパーク訪問（全校児童生徒対象）…年１回
・近くにある老人ホームを訪れ、お年寄りの方々に日本文化（折り紙、習字、お手玉、あやとり、けん玉、歌、日本のクイズや昔話）の紹介を行う。
・日本の踊りを紹介した。（炭坑節を一緒に踊ったり、よさこいを披露したりした。）
・日本の歌を英語に直したりして合唱した。

◆現地理解をするための講話
・様々な考え方や生き方を知り、広い視野がもてるよう、現地の方、在留邦人、ＪＩＣＡ青年海外協力隊、日本企業の方々から、南アフリカの現状や企業の様子を聞く機会を設けた。

（４）児童生徒の安全を確保するために

この国では、日本では考えられないような事件や事故が発生するため、児童生徒に対しては安全に生活できるような指導を行っている。学校の施設内には、児童生徒の安全を確保するために周囲にエレクトリックフェンスが張り巡らされ、校舎にはバーグラバーが設置されている。さらに警備会社とも契約し、警備員を２４時間体制で配備している。不測の事態を想定した避難訓練が年に５回実施されている。

①バスジャック訓練

児童生徒はスクールバスを利用し、登下校を行っている。さらに、校外学習などにおいても利用することが多い。そこで、バス利用時に拳銃を手にしたハイジャッカーに襲われたときのことを想定し、警備会社とも協力しながら年に１回実施している。この日は保護者にも来校していただき、訓練の様子を見ていただく。

警備会社の方からもしバスジャックにあった場合の対応の仕方について説明してもらい、その後、訓練をする。「犯人の顔を見ない。」「わからない言葉でも周囲の雰囲気を読み取り、素早く避難する。」「何も持たないで避難する。」「人質になってしまった場合は、慌てない。」などの注意事項を意識しながら、一人一人が真剣に訓練を行う。あまりにもリアルに行うため泣き出す子もいたり、その後の心理的なフォローも教師が行わなければならない。

②外部侵入者及び学校周辺での暴動に対する訓練

もし、学校内に不審者が侵入した場合、学校周辺で暴動が起きた場合を想定した訓練があり、学校のスタッフも一緒に訓練に参加してもらう。危険度によって避難場所や方法が異なるが、バーグラバーが設置してある部屋に避難したり、大きな金庫に身を寄せて避難することも行った。私たち教員は必ず「パニックボタン」というものを持たされ、不測の事態が生じた場合はそのボタンを押し、学校に知らせることになっている。

幸いにも３年間、児童生徒がいる間に緊急事態は発生しなかったが、夜間に学校内のものが盗まれたり、停電によってエレクトリックフェンスが作動しなくなり、児童生徒を下校させたことがありました。海外での生活の中で常に緊張感をもって勤務をしなければならないということは、とても辛いことでもあった。

（５）野外学習・ふれあいウィーク

毎年、１月下旬に野外学習（小学部５年生～中学部２年生）、ふれあいウィーク（小学部１年生～小学部４年生）が行われている。野外学習については、世界遺産になっているドラケンスバークに２泊３日で様々な体験活動をする。乗馬、飯ごう炊さん、天体観測、スケッチハイキングなどを行う。ふれあいウィークは３日間、様々な場所に行き、学校ではできないことなどを体験したり、見学したりする。ゴールドリーフシティでは金の発掘や生産の様子、環境センターでは南アフリカの環境について学ぶ。さらにキャンプアクティビティでは、現地のキャンプ指導員に来てもらい、様々なアクティビティを行う。

ふだん体験できないことばかりであり、また縦割り活動での団体行動で子どもたちは多くのことを学んでいた。

４．現地理解をしていくために

子どもたちと同様、教師自身も現地理解を進めるために様々な取り組みや調査を行い、教材化できるものについては教材化し、現地理解教育の実践に生かしていた。また、何かできることはないかといろいろと探し、ちょっしたボランティア活動も行ってきた。

（１）ソウェト（SOWETO） への訪問

SOWETO とは SOUTH WEST TOWNSHIP の略で、南アフリカ最大の旧黒人居住区である。ここに約１５０万人が住んでいる。（この地区にいる黒人の方に聞くと、約３００万人いるという答えも返ってくる。）もちろん黒人の方ばかりである。ここ数年、ソウェトの人口はあまり増減がない。裕福になった黒人はソウェトを出て行きますが、一方で生活できなくなった貧しい黒人が、ソウェトに戻ってくることもある。ここソウェトは治安上、個人で訪れることができません。しかし、ＪＶＣ日本国際ボランティアセンター南アフリカ現地事務所代表の津山直子さんにお誘い頂き、ボランティア活動を展開している場所の一つであるソウェトを訪れた。

ここで、子どもたちにインタビューをして、日常生活の様子、子どもたちの遊びや夢などを聞いてみた。質問と答えは下記の通りである。

●学校で好きな教科は？
　多くの子どもたちは算数と答えた。少数の答えの中には、ソト語や理科があった。１人だけでしたが、アフリカーンス語と答えた子がいて驚いた。

●好きな食べ物は？
　予想通りの答えが返ってきた。ハンバーガーや肉類であった。ちなみに、子どもたちはおやつ代わりにサトウキビをかじっていた。

●もし１００ランド（約１５００円）あったらどうしますか？
　半数以上の子どもが「貯金」と答えた。貯金をして好きな物を買いたいということであった。中には、貯金をして両親に生活資金として渡したいという子もいて驚いた。

●将来の夢は？
　男の子は警察官、女の子は学校の先生という答えが大半であった。医者と答えた子も１人いた。

　アンケートの結果をみて、特に感じたのはお金に対してとても堅実であるということ。すぐには使わず、何を買うのかはっきりした時点で使うようである。職業に関しては、実はどちらも南アフリカでは人気のない職業である。子どもたちの普段接している人が警察官や先生なのかもしれないが、もっと違った視点で様々な職業を見ていくと視野が広がると思った。進路指導みたいなものがあれば、ソウェトの子どもたちも将来、もっと夢を持つことができるのではないかと思った。
　その他にも様々な小中学校にも視察に行ったり、ソウェトでボランティア活動をされている方からお話を聞いたりと、多くの事柄について、教材化を図っていった。

（２）ちょっとしたボランティア活動

　現地で活躍されている方々の中にボランティア活動をされている方がいらっしゃる。私自身もその活動に共感し、少しであるがお手伝いをさせていただいた。
　一つ目は、黒人の子どもたちにサッカー指導をした。同じ日本人学校の体育教師や英語教師と一緒に行った。ＪＶＣの津山さんの勧めでもあった。十分な施設や道具がない中で練習をしている。基本的な練習などを中心に、日本式の練習を取り入れながら行った。
　二つ目は、南アフリカ国内で移動図書館を展開されている蓮沼さんという方である。移動図書館の活動について、実際に図書館車に乗せていただいたりした。さらに、理数系の指導が十分でない黒人の教師に対して日本で使われている算数セットを活用するように勧められている。そこで、私自身がその算数セットの使い方などについてレクチャーさせていただいた。

　最後に日本語指導である。現地の人の中には日本で仕事をされていた方もいらっしゃる。また、日本に対して興味をもっていらっしゃる方もいる。日本語を学びたいという人がおられ、期間は違うが２人に日本語指導を週１回ペースで行っていた。

（３）環境問題

ゴミについての課題がある。ゴミの分別化がされていない。一つの袋に全てのゴミを入れて捨てているのが現状である。また、路上などいたるところにゴミが落ちいる。ソウェト地区を見に行ったときも、近くの川にゴミが捨てられていたり、生活水をそのまま流している様子を見ることになり、大変いやな思いをしたことを思い出す。最近になって、少しずつであるが変化も見られるようになってきた。紙類を回収したり、ビンを回収したりと、少しずつであるがリサイクルをしていこうという動きが出てきている。南アフリカの人たちも少しずつ環境を大切にしていこうという意識を持ち始めているが、長期的視野に立って進めていかなければならない問題でる。

水についての課題もある。世界でも有数のよい水が飲めるという南アフリカ。庭に毎晩水をまき、緑を保つ家庭も多くあり、水の消費量は結構ある。水道料金も日本に比べると安く、南アフリカの人たちは節水するという意識はあまりない。そんな中、日本人学校の近くに環境センターがあり、現地校の子どもたちが学んでいる。小さい頃から環境の大切さを学習し、それを大人たちに説明したり、大きくなったときに生かされたりすればよいと思う。

スワジガラスでは、家庭で不要になったビールビン、ワインのビンなどを集めて、それをきれいに洗ってから炉の中に入れ、溶けたガラスを取り出し、ワイングラスや花瓶などを作っている。つまり再生ガラスを利用している。子どもたちにも、家庭でいらなくなったビンをぜひ分別して工場にもってきてほしいということを言っておられた。

５．ヨハネスブルグ日本人学校での実践

ヨハネスブルグ日本人学校では「国際社会を心豊かに生きる子どもの育成」という研究主題、「南アフリカを知り、日本を見つめる活動を通して」という副主題で国際理解教育・現地理解教育の研究を行っていた。各教諭や年１回実践を必ず行い、共有していた。私自身も生活科や学習発表会という大きな行事で実践を行った。

（１）生活科の実践から（１・２年生合同授業）

①「南アフリカの遊びで楽しもう」（平成１７年度の実践）

自分たちの身のまわりや学校を見つめ、いろいろな遊びを通して、様々な人とかかわるようにさせた。さらに、南アフリカの人々や遊びにも目を向け、人とのかかわりや遊びを楽しく行うことができるようにした。子どもの視点を学校や学校外へと広げ、いろいろなことにチャレンジしながら、自分のできることを広げていこうとする積極的な態度を育てていった。南アフリカにいながら、南アフリカのことについて意外と知らないことが多い。現在の自分たちにとって身近な南アフリカの事柄について理解し、さらに視野を広げていけるような児童を育てていくように努めた。

あそびのめいじんになろう

（９時間）

●自分の知っている日本の昔の遊びを発表しよう。
●日本の昔の遊びをみんなで楽しもう。
・けん玉名人になろう。
・お手玉名人になろう。
・あやとり名人になろう。
・○○○名人になろう。
●小さい子や現地の人にも教えてあげよう。

南アフリカのことを知ろう　　●学校で働いている南アフリカの人を知ろう。
●南アフリカの遊びを教えてもらおう。
（７時間）　　●教えてもらった遊びをみんなで楽しもう。
●教えてもらったスタッフと対戦してみよう。

②「南アフリカの昔のことを知ろう」（平成１８年度の実践）

今まで子どもたちは何気なく、日本人学校のスタッフの人たちとかかわってきている。そんな子どもたちにとって、意識して身近な人たちに目を向けたり、さらに意欲と関心を高めるため、もっといろいろな人たちとのかかわりをもたせたい。そのような体験などを通して、「もっといろいろなことが知りたい。」という明確な目的意識をもって、主体的に人とかかわっていく活動を設定した。

南アフリカのことについて、生活科や学習発表会を通して、遊びや食べ物など少しずつ知り、現在の自分たちにとって身近な南アフリカの事柄について理解し始めている。日本人だけではなく様々な人とのかかわりを通して、日本だけではなく、南アフリカのことについてもさらに視野を広げていけるような子どもを育てていくように努めていった。

むかしのことを知ろう　　●お父さんやお母さんが小さい頃の様子を聞こう。
●校長先生が小さかった頃の様子を聞こう。
●ピーターさんが小さかった頃の様子を聞こう。
●木山さんのおばあちゃんが小さかった頃の様子を聞こう。
●日本と南アフリカのむかしのことを比べてみよう。

③「南アフリカのことを教えてもらおう」（平成１９年度の実践）

ここでは、南アフリカのことを知る切り口として、今自分たちが通っている日本人学校の探検を４月・５月に行い、さらに、そこで働くスタッフに焦点を当て、南アフリカの人たちとのかかわりを通し、南アフリカのことについて知っていくことにした。そこから、南アフリカの様々なことが見え、子どもたちなりの気付きが出てくるのではないかと期待していた。

今回、スタッフの人たちについて学習していく中で、２年生の子どもたちから「去年、遊びや食べ物について調べたけど、今年は違ったことを調べてみたい。」という発表があった。さらに、「バスに乗っていたり、スタッフの人たちが話している言葉で、英語ではないような言葉を聞いたことがある。」という発表があった。そこで、まず最初に言葉のことについて学習し、南アフリカにはたくさんの言語があることに気付き、少しでも覚えて、スタッフの人たちとあいさつできるようになればとという願いがあった。

みなみアフリカの人たち　　●どんな人たちがはたらいているんだろう。
（２１時間）　　●スタッフの人たちにはなしをきこう。
●みなみアフリカのことをしろう。

（２）学習発表会

ヨハネスブルグ日本人学校にとって大きな行事の一つに「学習発表会」がある。毎年、校内の研究内容とリンクをさせた形で行っている。子どもたちにとっても、私たち教員にとっても南アフリカを知り、日本を見つめるよい機会となっている。私たち教員にとっては、大切な実践の場となっている。

①「レインボーネーション」（平成１７年度）

「Rainbow Nation」というテーマで、南アフリカの様々な民族のことについて、各ユニットごとで調べたことを劇で表現したり、パワーポイントを使いながら発表した。

・低学年ブロック…コサ族、ズールー族といった南アフリカの代表的な黒人の民族について発表
・中学年ブロック…白人のアフリカーナについて発表
・高学年ブロック…南アフリカと関わりの深いインド人について発表
・中学部ブロック…南アフリカのそれぞれの民族について詳しく発表

②「過去・現在・未来」（平成１８年度）

ヨハネスブルグ日本人学校が開校４０周年という記念の年でもあることから、テーマを「過去・現在・未来」と設定し、南アフリカと日本の４０年間、さらにはヨハネスブルグ日本人学校の４０年の歩みを、先生と子どもたちが協力し合いながら様々な情報を収集し、発表へとつなげていった。

・低学年ブロック…現在を担当し、「遊び」「食べ物」「自分たちの夢」について発表
・高学年ブロック…過去を担当し、「ネルソンマンデラ物語」と題して南アフリカの歴史を発表
・中学部ブロック…未来を担当し、南アフリカの未来について考え、発表
・学習発表会実行委員…ヨハネスブルグ日本人学校の４０年の歩みを発表

③「大地から学ぶ」（平成１９年度）

平成１８年度に完成した副読本「大地から学ぶ」を活用し、南アフリカを語れる子であってほしいという願いから、南アフリカの自然分野・社会分野について発表した。

・低学年ブロック…自然分野の中から「植物」「動物」「鳥」について発表
・高学年ブロック…社会分野の中から、「南アフリカが１００人の村だったら」と題して発表
・中学部ブロック…社会分野の中から、「人類の起源」「日本との貿易関係」について発表

６．おわりに

南アフリカ共和国ヨハネスブルグ日本人学校での３年間の勤務を終え、無事に帰国した。この３年間、本当に多くの方々に支えられた。同僚、保護者や子どもたち、日本人会の皆さんに感謝の気持ちでいっぱいである。仕事の面では、日常の授業実践を大切にし、国際理解教育や現地理解教育の実践を行った。特に生活科や学習発表会の行事を中心に現地理解教育を行ってきた。現地にいるからこそできる実践がたくさんできた。また、南アフリカで活躍されている日本人の方々にも影響を受けた。

南アフリカで過ごした３年間は、大変貴重な体験であった。正直、大変なことも多く、辛いこともあったが、得るものも多かったことは事実である。これから世界を見つめたときに、アフリカの中でも南アフリカは注目される国だと思う。ＦＩＦＡワールドカップを控え、益々発展していくと思われる。しかし、課題があまりにも多く、その課題を自国で解決していくだけの力はこの国には、まだない。アパルトヘイト時代の弊害が露出している。ＨＩＶ／Ａｉｄｓ、家族の分散化、事務処理能力の低下、犯罪の多さなど、今後、この国がどのような道を歩んでいくのかを、私自身日本から注目していきたい。